『文藝春秋』「一頁人物評論」「人物紙芝居」欄一覧
――付・解題――

大澤　聡

【解題編】

本稿は、昭和戦前期に雑誌『文藝春秋』誌上で連載された「一頁人物評論」欄、および「人物紙芝居」欄に関する情報を整理するものである。この作業は、本誌前号に発表した拙稿（大澤聡「『中央公論』「街の人物評論」欄一覧――付・解題」『リテラシー史研究』第三号、二〇一〇年一月）の続編と位置づけることができる。というのも、今回取りあげるふたつの連載欄は、あとで確認するように、前稿で整理した『中央公論』「街の人物評論」欄をあきらかに意識したものと考えられるからである。模倣企画とさえ見ることもできよう。

以下では、限られた分量ではあるが、解題編として、「一頁人物評論」欄（以下、「一頁」とも）、および「人物紙芝居」欄（以下、「紙芝居」とも）の連載経緯と形式的特徴とに焦点をしぼって簡単にまとめておきたい。その際、先行してスタートした「街の人物評論」（以下、「街」とも）との比較に力点をおくことで両者の関係にも目配りする。

まずは、連載の経緯から見ておこう。雑誌『中央公論』の一九三三（昭和八）年一二月号から四〇年一〇月号までのおよそ七年間にわたって、「街の人物評論」と題されたコラム欄が設置された。そのときどきに巷間で話題となっている人物や、動向が注目される出来事の渦中の人物などを、分野不問でゴシップ混じりに紹介・批評した文字テクストに、対象人物を模した大きめのイラストが付され、個々の記事が成立している。そうした融合記事を複数並列することでまとまったコーナーを形成している。当該連載は、『中央公論』の目玉記事のひとつとなり、文壇・論壇の内部において、あるいは一般読者のあいだにおいて、大きな反響を呼び一定の成功をおさめることになる。

この連載開始からおよそ半年後、競合誌のひとつでもあった『文藝春秋』が一九三四年六月号に、それに追随するかたちで「一頁人物評論」欄を設置する。やはりこちらも話題の人物を紹介した文章と漫画とで構成される。一九三五年一二月号までの一年半のあいだ続いたのち、「人物紙芝居」と意

匠を替える。「紙芝居」は、一九三六年三月号から四一年二月号までのちょうど五年間、不定期の休載を挟みながら長きにわたって連載された。終了時期を照合すると、「街」の連載終了から四ヵ月後に姿を消していることが分かる。

論壇・文壇を代表する『中央公論』『文藝春秋』の二誌がともに、人物評論に特化した連載枠を維持していたことは注目に値する。一九三〇年代半ばから四〇年代初頭のジャーナリズムにおいて、「人物評論」という記事ジャンルは隆盛をきわめていた。社会事象でもテクストでもなく、人物そのものを批評対象に設定した論説や雑文が各種総合雑誌・文芸雑誌の基軸となる。また、同時期には、政治領域と同様のスタイルで文壇や論壇を風刺した漫画も大きなブームをむかえていた。こうしたジャーナリズムにおける趨勢を考えるならば、二誌において「人物評論」と「漫画」を組合わせた類似欄が継続していたことはきわめて自然な事態だったといえる。

またこれらの連載が、結果的にではあれ、同じ号に掲載される関連文献の解説記事にもなっていたという点は重要である。たとえば、『文藝春秋』一九三五年六月号には、「小栗総監に暴力団検挙を訊く」（四八―五二頁）というヒアリング記事があるが、同号の「一頁」では小栗一雄を取りあげ、平易にそのバックボーンなどを紹介している。編集の意図はともかくとして、予備知識をもたぬ読者はそれをサブテクストのように活用することができたはずである。前稿では、こうした側面に一般読者に対するリテラシー涵養の機能を見出した。詳細な時代要因や同欄が存在したことの意義については、反復になるため、ここでは省略し前稿解題にゆずる。また、理論的な分析を行なった、別稿（大澤聡「「人物評論」の時代」『マス・コミュニケーション研究』第七八号、二〇一一年）もあわせて参照されたい。

次に、形式的特徴について、やはり「街」と比較しながら順に見ていくことにしよう。前稿で紹介したように、「街」は初回の形式を例外として、毎月三から五名の人物を取りあげる。各頁三段組で、一人物につき二、三頁程度が割かれ、それがページを連続して並べられる。連載終了をむかえるまで、このフォーマットは持続され、連載は一度も欠かすことなく続く。大半の文章に対象人物を模したイラスト（初期の一時期は写真も）が付され、そのサイズは平均して、横は一頁の文字列の半分程度、縦は一段半程度である。

他方、「一頁」は、表題のとおり一人物につきちょうど一頁に収まる分量に設計されており、やはり三段組で、文字数にして一二〇〇字程度の紹介・批評がなされる。「街」と同様、対象人物のイラストが頁中央に付されるものの、すべて顔だけの漫画になっている。対象人物の全身をデフォルメしたケースの多かった「街」とは異なる点である（なお、写真は一度もない）。しかも、スペースの関係上、かなり小さい

ものにならざるをえない。こうした文章と漫画の融合記事が二から五組、連続ではなく区々のページに掲載される（ただし、目次ではまとめてひとつのコーナーとして表記）。

「街」「一頁」の両連載はおおまかな構成要件は共通するものの、表面的なレイアウトの点でかなり異なっていた。ところが、「一頁」のあとを受けて開始された「紙芝居」の方は、「街」と見分けがつかないほどの近似ぶりを示す。先の「街」に関する説明がほとんどそのままあてはまってしまう（ちなみに、「文字＋絵」という形態、そして講談的要素を多分に含んだその文体は、当時のニューメディアであった「紙芝居」の名に相応しい）。したがって、「紙芝居」と「街」の連載期間が重合する、一九三六年三月号から四〇年一〇月号にいたる四年半のあいだ、『中央公論』『文藝春秋』の二誌は区別がつきにくい同種の連載企画を掲載し続けていたことになる。この重合は、前述した時代的な必然性に由来する現象と見ることもできるが、それ以上に、「街」の好評をうけて『文藝春秋』が模倣した結果と見なすべきであろう。他誌に存在するものが自誌に欠如していてはならないという、単純な「横並びの責務感」が作動したのかもしれない（当時の誌紙面にしばしば見られる現象である）。

さて、「街」の文字テクストには、それぞれの末尾に担当者名が付されており、匿名ながらも、いくつかの証言や単行本収録状況などから、何人かの書き手を同定することが可能であった（阿部真之助、杉山平助ら）。ところが、「一頁」「紙芝居」は担当者名が付されておらず（「紙芝居」初回のひとつの文章末にだけ「青三吉」という名が見られる）、無署名記事である。そのためもあって、今回の調査では、文章パートの担当者の見当をつけることができなかった。個々の記事の文体や書きぶりからすると、そのときどきで（多くの場合はおそらくさほど有名ではない）書き手が入れ替わり立ち代り執筆する形態だったのではないかと想像される。

また、イラストについては、「街」の場合、欄全体の末尾にある作画家紹介や漫画自体に記されたサインなどから、堤寒三と麻生豊（一時期は宍戸左行も）によるものであったことが確認できた。他方、「一頁」「紙芝居」もサインから、両連載全体をとおして石川義夫（別名義＝利根義雄）によるものがもっとも多いと判明した（「義」「義夫」「いしかは義」などのサイン）。その他の描き手としては、「一頁」の場合、清水崑（サイン「KON」）のものが確認できる。「紙芝居」は、連載開始数ヶ月は堤寒三（「寒」）、続いて一九三七年前後は和田邦坊（「邦坊」）、三八年前後は生沢朗（「朗」「朗IKUZAWA」）、連載終盤は加藤悦郎（「Etu」）のものが多く見られる（詳細は一覧参照）。石川をベースとしながら、その時期ごとに右の交替要員がおおまかに存在していたことがうかがえる。

堤を除けば、新漫画派集団周辺の描き手であり、同サーク

ルのなかで持ちまわっていたことも垣間見えてくる。このことは、「街」がそれと対立する新鋭漫画グループのメンバーによって担われていた事実と照らし合わせるならば、当時の漫画業界の人的ネットワークの一端が透かし見え興味深い。なお、「紙芝居」開始当初に例外的に堤が起用されたのは、「街」を強く意識した結果であろうか（初回分で、「街」の文章担当のひとりであった杉山平助を取りあげたこと、またその文章に匿名ながら署名が見られること、なども「街」に対する目配りを連想させる）。

当時、人気漫画家として様々な紙媒体で仕事を展開していた彼らのイラストは、それ自体がひとつの人物批評にもなりえている。対象によって描線やスタイルを適宜変更するなど、読者を飽きさせぬ遊びや工夫が確認できる。なにより、同欄全体を視覚的にもモダンで平易なものに見せる効果をもったはずだ。高度で生硬な論説群が大半を占めるなか、同欄はビジュアル面からして他頁との差別化を図るものであり、知的な総合雑誌のなかでもイレギュラーな雰囲気を漂わせる。

取りあげられる人物の属性は、「一頁」の場合、政治家や官僚、実業家、軍人といった政治・経済領域を中心としている。『文藝春秋』が（文藝誌という出自のためもあり）他の総合雑誌と比較して不足しがちであった領域を補完する目論見が多少なりともあったのかもしれない。それが「紙芝居」に意匠替えすると、学者、作家、評論家のほか、芸能人や力士なども対象範囲に加わり、バラエティー豊かな人選方法に転換する（今回の一覧では対象人物の職業も簡略的に付記した）。その点でも、「紙芝居」は「街」とまったく同じ傾向を見せる。また、同一方針のため、当然ながら両誌近接月における重複も多い。今回の一覧ではその点も情報として組入れた。

ことほどさように、「一頁」はある程度は自前の企画であったと見なすこともできるが、「紙芝居」の方は「街」が話題になったことをうけての模倣企画だと判断するほかない。形式面、内容面において差異を見出す方が難しい。だが、ここではあえて、今回の整理で浮かびあがってきた細かな差異を二点ほどあげておく。

まず、軍人の扱いについて。「街」が戦況の進展とともにしだいに軍人を取りあげる頻度が増加していったのに対して、「一頁」「紙芝居」は最初からその比率がかなり高かった（ちなみに、「街」と「紙芝居」の消失時期のおおよその一致を考えるならば、原因はおそらく匿名執筆行為そのものが次第に社会情勢的に許容されなくなってきたことにあると想定される。つまり、政治家や軍人に対する揶揄が自由に行なえなくなったわけだ）。

もう一点は、連載としての一貫性について。連載期間中、「街」の方は初回を例外とするならば、休載月が一度もなかった。それに対して、「紙芝居」の方は、不掲載の月が目に

つく。また、「街」が終始その形式を一貫させているのに対して、「紙芝居」の方は、同欄を利用してイレギュラーな形式（「新党黒幕四人男」のような特定のテーマ設定や、「池田清と本間精」のような複数人物評など）を導入するなど、揺らぎが散見される。また、取りあげる対象が二人のこともあれば八人のこともあるといったぐあいに、かなりの幅が確認できる。さらには、紙幅調整のためであろう、人物のイラストがないことも多く確認できる。総じて、「街」の一貫性と比較した場合、「紙芝居」のルーズさ（柔軟さ）が目立つ。ちなみに、文章のレベルも総じて「紙芝居」の方が低い。

さて、前回の「街」に続いて、「一頁」「紙芝居」の一覧を作成することにはどういう意味があるのか。さしあたり三点あげておこう。第一に、「街」が拾いきれなかった人物に関する同時代の印象を確認することが可能になるということ。二誌の連載をあわせると、相当の数の人物評がそろうことになる。第二に、「街」と重複する人物の描写・評価の差異を確認することで、評価の相対化が可能になるということ。そして第三に、類似した描写をつうじて、対象人物の世間的なイメージが形成・固着していくプロセスの一端を確認できるということ。前稿にも記したように、たとえ記事が事実誤認や意図的誤謬を含むものであっても（あるいはそれゆえに）、そうしたゴシップ的表現を手がかりに、当時の著名人物に対する一般的イメージを把握することができる。

さしあたり、以上の三点を今回の一覧作成の意義としてあげておく。漫画を含むリーダブルな読物として企図されているという点では、当時の一般読者のみならず、後世の私たちも享受するに十分耐えうるコンテンツに仕上がっている。二誌連載を統合し、当該期の人物事典ツールとして活用していくことも可能であろう。

【一覧編】

・各号分連載の以下三点の情報をそれぞれ列挙したものである。①掲載頁、②作画担当者の氏名、③取りあげられた人物の氏名とその属性。
・氏名の表記は小見出しに従い（「松平と佐佐木」などもそのまま）、目次の表記と異なる場合は適宜、「※」を付して注記した。また、旧漢字は新漢字にあらためた。
・対象人物の属性・職業は、便宜上付したものであり厳密ではない。また、言及当時までの主要な業種を優先した。
・今回、紙幅の関係で表示できなかった、各人物の生没年や個々の人物ごとの掲載頁、テクストの再録先などのデータを含む詳細な一覧については別の機会にあらためて提示したい。
・同月、もしくは前後二ヶ月ずつのあいだに、「街の人物評論」でも取りあげられた人物には、「＊」をつけた。
・二度取りあげられた人物は次のとおり（順不同）。

一木喜徳郎、小栗一雄、南次郎、横光利一、川越茂、長與又郎、東郷茂徳、河田烈、沢田廉三、風見章、久原房之助、河相達夫

・特記事項などは適宜「※」で記した。

■「一頁人物評論」（一九三四―三五年）

一九三四（昭和九）年

六月号　四七、七一、一〇一、一〇九頁　画＝石川義夫

＊天羽英二（外交官）、一木枢府議長（政治家　※目次「一木喜徳郎」）、林陸相（軍人、政治家　※目次「林銑十郎」）、＊河合良成（政治家、実業家）

七月号　六三、七九、一一九、一四一、一六一頁　画＝石川義夫

＊笹川臨風（評論家）、坂野少将（軍人）、＊小野賢一郎（俳人）、宇垣一成（政治家、軍人）、＊清浦奎吾（政治家）

八月号　八一、一一三、一三三、一四三、一九三頁　画＝石川義夫

小原直（検察官）、河田烈（官僚）、門野幾之進（政治家、実業家）、中島久万吉（実業家、政治家）、尾関本孝（僧侶）

九月号　七三、八三頁　画＝石川義夫

津島寿一（官僚）、早川徳次（実業家）

一〇月号　七三、八三、九五、一二七頁　画＝石川義夫

山本五十六（軍人）、山下又三郎（役人）、三土忠造（政治家）、星野錫（政治家）

一一月号　五五、六七、七三、一二三、一二九頁　画＝石川義夫・清水崑（松永のみ）

＊吉田茂（政治家）、永野修身（軍人）、乃木元智（伯爵）、松永安佐衛門（実業家）、大倉喜七郎（実業家）

一二月号　七六、七七、一二一頁　画＝石川義夫・清水崑（小栗のみ）

児玉秀雄（官僚、政治家）、小栗一雄（官僚）、高橋三吉（軍人）

一九三五（昭和一〇）年

一月号　五七、七三頁　画＝石川義夫

＊松方乙彦（実業家）、＊南次郎（軍人）

二月号　四九、七七、一一三頁　画＝石川義夫

長岡隆一郎（官僚）、藤井五一郎（裁判官）、長與又郎（医学者）

三月号　七七、八五、一〇九頁　画＝石川義夫

鈴木美通（軍人）、＊岩田宙造（政治家、弁護士）、＊大谷句仏（僧侶）

四月号　六九、一〇九、一二五頁　画＝石川義夫

土肥原賢二（軍人）、鷹司信輔（政治家）、尾崎行雄（政治家）

五月号　八三、九三、九九頁　画＝石川義夫（山崎・腰本は無署名）

山崎達之輔（政治家）、宮沢俊義（法学者）、腰本寿（野球監督）

六月号　三九、四七、五三、六九頁　画＝石川義夫

小栗一雄（官僚）、＊白根竹介（政治家）、津雲国利（政治家）、兼常清佐（音楽学者）

七月号　五一、七七、八三頁　画＝石川義夫

深井英五（財政家）、＊山本条太郎（実業家、政治家）、福沢泰江（村長）

八月号　四三、七七頁　画＝石川義夫

酒井隆（軍人）、市川寿美蔵（歌舞伎役者）

九月号　五三、六一、七一頁　画＝石川義夫

真崎甚三郎（軍人）、渡辺錠太郎（軍人）、高木復亨（実業家）

一〇月号　四七、八一、八七、九一頁　画＝石川義夫

望月圭介（政治家）、川島義之（軍人）、上田貞次郎（経済学者）、

賀屋興宣（官僚、政治家）
一一月号　四五、六三頁　画＝石川義夫
＊三浦新七（経済学者、実業家）、一木喜徳郎（政治家）
一二月号　五五、七九頁　画＝石川義夫
小倉正恒（実業家）、＊大谷竹次郎（実業家）

■「人物紙芝居」（一九三六―四一年）

一九三六（昭和一一）年

三月号　二二八―二三三頁　画＝石川義夫
杉山平助（評論家）、＊横光利一（小説家）、田中路子（歌手、女優）　※杉山評の文章にだけ「青三吉」の署名あり。
四月号　三〇八―三一四頁　画＝堤寒三
潮恵之助（官僚）、吉川英治（小説家）
五月号　二六六―二七二頁　画＝石川義夫・堤寒三（谷のみ）
＊有田八郎（外交官、政治家）、谷孫六（評論家）
六月号　二八二―二八八頁　画＝堤寒三・和田邦坊（富田のみ）
＊富田幸次郎（新聞人、政治家）、＊正宗白鳥（小説家、評論家）、阿部真之助（評論家）
七月号　三三八―三四五頁　画＝和田邦坊
光永星郎（実業家）、＊川越茂（外交官）、双葉山（力士）
八月号　三三八―三四三頁　画＝和田邦坊
喜多少将（軍人）、島崎藤村（小説家）、松沢一鶴（水泳監督）
九月号　三一〇―三一五頁　画＝和田邦坊（山田は漫画なし）
南次郎（軍人）、＊池尾芳蔵（実業家）、山田盛太郎（経済学者）
一〇月号　三四二―三四五頁　画＝和田邦坊
小林躋造（軍人）、柴田徹心（官僚）
一一月号　休載
一二月号　休載

一九三七（昭和一二）年

一月号　四五四―四六〇頁　画＝和田邦坊
玉錦（力士）、花柳寿美（舞踊家）、萩原淳（棋士）、柳家金語楼（落語家、喜劇俳優）
二月号　三〇四―三〇九頁　画＝和田邦坊
＊神近市子（評論家）、＊早川三郎（官僚）、笠置山（力士）
三月号　三二六―三三三頁　画＝和田邦坊
大橋八郎（官僚、政治家）、＊十河信二（官僚）、板垣征四郎（軍人）、池田成彬（財政家）
四月号　三六二―三六七頁　画＝石川義夫
白鳥敏夫（外交官）、大谷登（実業家）、＊児玉謙次（実業家、政治家）
五月号　二六〇―二六七頁　画＝和田邦坊
米内光政（軍人、政治家）、横光利一（小説家）、万代順四郎（銀行家）、徳川夢声（活動弁士、俳優）
六月号　二九〇―二九七頁　画＝和田邦坊（伊丹は漫画なし）
梅津美治郎（軍人）、河相達夫（外交官）、木村栄（天文学者）、伊丹万作（映画監督）
七月号　三四〇―三四五頁　画＝和田邦坊
＊風見章（新聞人、政治家）、斎藤樹（官僚）、＊山室軍平（宗教家）
八月号　二九八―三〇三頁　画＝和田邦坊
＊松平と佐佐木（政治家　＊は松平のみ　※目次「松平頼寿と佐佐木行忠」）、川越茂（外交官）、＊小橋一太（政治家）

九月号　二九六―三〇〇頁　画＝和田邦坊
川端と尾崎（小説家　※目次「川端康成と尾崎士郎」）、小山と金光（政治家　※目次「小山松寿と金光庸夫」）
一〇月号　休載
一一月号　三三〇―三三八頁　画＝石川義夫
船田中（政治家）、ボゴモーロフ（外交官）、周恩来（政治家）、＊滝正雄（政治家）
一二月号　三一二―三一七頁　画＝石川義夫
＊木戸幸一（政治家）、浅原健三（政治家）、＊東郷茂徳（外交官）

一九三八（昭和一三）年

一月号　四一六―四二一頁　画＝石川義夫
＊吉田善吾（軍人）、木村義雄（棋士）、佐藤春夫（小説家、詩人）
二月号　三〇四―三〇九頁　画＝石川義夫
広瀬久忠（官僚）、久原房之助（実業家、政治家）、＊武蔵山（力士）
三月号　三二二―三二八頁　画＝石川義夫
三室戸敬光（政治家）、川喜多かしく（実業家）、王克敏（政治家、銀行家）
四月号　三一二―三一八頁　画＝石川義夫（永井は無署名）
永井松三（外交官）、吉岡重三郎（実業家）、谷正之（外交官、官僚）
五月号　二八四―二九〇頁　画＝石川義夫
平生釟三郎（実業家、政治家）、砂田重政（政治家）、長與又郎（医学者）
六月号　三六四―三七〇頁　画＝生沢朗
大河内正敏（物理学者、政治家）、及川古志郎（軍人）、山田わか（運動家）
七月号　二八〇―二八六頁　画＝生沢朗
暉峻義等（生理学者）、＊坂田三吉（棋士）、新城新蔵（天文学者）
八月号　三七六―三八五頁　画＝生沢朗（大江は無署名）
館哲二（官僚、政治家）、阿部信行（軍人）、村田省蔵（実業家）、大江スミ（教育家）
九月号　三五〇―三五六頁　画＝生沢朗
＊近衛文隆（軍人）、村瀬直養（官僚）、島木健作（小説家）
一〇月号　三七二―三八〇頁　画＝生沢朗
大島浩（軍人）、田阪具隆（映画監督）、佐藤尚武（外交官）、＊小平権一（官僚）
一一月号　三二四―三三一頁　画＝石川義夫
＊沢田廉三（外交官）、影佐禎昭（軍人）、松田甚次郎（運動家）
一二月号　二三二―二三八頁　画＝石川義夫
＊八田嘉明（官僚、政治家）、林芙美子（小説家）、佐藤賢了（軍人）

一九三九（昭和一四）年

一月号　二八二―二八八頁　画＝生沢朗
山脇正隆（軍人）、高田保（評論家）、山田三良（法学者）
二月号　二八二―二八八頁　画＝生沢朗
石渡荘太郎（官僚）、＊田辺治通（官僚、政治家）、玉ノ海（力士）
三月号　二八二―二八八頁　画＝生沢朗
麻生久（運動家、政治家）、風間栄一（レスリング選手）、＊舞出長五郎（経済学者）
四月号　三二八―三三三頁　画＝生沢朗
東郷茂徳（外交官）、山岸二郎（テニス選手）、小野島右左雄（心理学者）

五月号　二二八―二三四　画＝石川義夫
＊太田耕造（政治家、教育家）、上村松園（画家）、高橋亀吉（経済評論家）
六月号　二九二―二九五頁　画＝石川義夫
頼母木桂吉（実業家、政治家）、岩波茂雄（出版人）
七月号　三一八―三二四頁　画＝石川義夫
＊副島千八（官僚）、城戸元亮（新聞人）、土居市太郎（棋士）
八月号　三〇八―三一二頁　画＝石川義夫
＊加藤外松（外交官）、＊石黒英彦（官僚）、竹内茂代（医師、運動家）
九月号　三一二―三一六頁　画＝石川義夫
堀内謙介（外交官）、河田烈（官僚）、岡田菊治郎（実業家）
一〇月号　三五〇―三五七頁　画＝加藤悦郎
唐沢俊樹（官僚）、＊遠藤柳作（政治家）、大村と大達（官僚、政治家　※目次「大村清一」「大達茂雄」）、池田清と本間精（官僚）、沢田廉三（外交官）　※対象数が多いため、各漫画がかなり小さく顔だけに
一一月号　二六六―二七二頁　画＝加藤悦郎
来栖三郎（外交官）、増田次郎（政治家、実業家）、＊古野伊之助（新聞人）
一二月号　三一四―三一七頁　画＝加藤悦郎
荷見安（官僚）、宮本武之輔（官僚）

一九四〇（昭和一五）年

一月号　休載
二月号　休載
三月号　休載
四月号　一七二―一七六頁　画＝加藤悦郎
牧野良三（政治家）、片山哲（政治家）、清瀬一郎（政治家、弁護士）　※目次の総題「政党人物紙芝居」
五月号　休載
六月号　一九六―二〇一頁　画＝加藤悦郎
堀切善次郎（官僚、政治家）、照国（力士）、中村草田男（俳人）
七月号　一一六―一一九頁　画＝加藤悦郎
有馬頼寧（政治家）、風見章（新聞人、政治家）、亀井貫一郎（政治家）、久原房之助（実業家、政治家）　※以降、漫画は顔のみのケースが一般化　※総題「新党黒幕四人男―人物紙芝居」
八月号　休載
九月号　二一六―二二一頁　画＝加藤悦郎（富田は無署名）
＊富田健治（官僚）、＊後藤隆之助（運動家）、下中弥三郎（出版人、運動家）、窪井義道（政治家）　※総題「新体制裏方四人男―人物紙芝居」
一〇月号　一九六―二〇四頁　画＝加藤悦郎
松本重治（ジャーナリスト）、犬養健（政治家）、久富達夫（新聞人）、小畑忠良（実業家、官僚）、大坪保雄（官僚）、奥村喜和男（官僚）、川面隆三（官僚）、沢村克人（ジャーナリスト）　※スペースの問題のため、漫画のサイズがかなり小さい　※総題「新体制下の中堅人物―人物紙芝居」　※「編輯後記」には、「企画を少し変へて」「比較無名とは云へ、いやしくも新時代の推進力と目される新人を採り上げた」とある（四一六頁）　※新体制におけるポジションが各々注記されている。
一一月号　一六八―一七五頁　画＝加藤悦郎

堀切善兵衛（政治家）、松前重義（科学者、官僚）、松宮順（外交官）、＊建川美次（軍人）

一二月号　二〇〇―二〇五頁　画＝加藤悦郎

栗原美能留（運動家）、小泉梧郎（官僚）、上泉秀信（新聞人、劇作家）、穂積五一（教育家）

一九四一（昭和一六）年

一月号　三二〇―三二五頁　画＝加藤悦郎（迫水は漫画なし）

菅原兵治（教育家）、迫水久常（官僚）、大橋武雄（実業家）

二月号　一八六―一九一頁　画＝加藤悦郎

萱場軍蔵（官僚）、城戸幡太郎（心理学者、教育学者）、河相達夫（外交官）

＊本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（おおさわ・さとし／日本学術振興会特別研究員）